

明日もマスクとアルコール

能村晋平

はじめに

今から15年程前。当時高校生だった私は世界史が大好きだった。驚きとロマン、時として恐怖に満ち溢れた過去に想いをはせながらの勉強は全く苦にならなかった。この時代に生きていたら私はどんな人生を送ったのだろうか、こんな時代に生まれていたら絶望的だ、あの時代の農民は気楽そうでいいな...等と空想を膨らませるのが愉しかった。

ただ、そんな楽しい空想は「平成の日本」—平和で、物質的に豊かで、しかもそれが未来に向かって永遠に続いていく（と当時は疑っていなかった）日本—を土台としていた。言い換えれば、高みの見物を決め込んでいたのである。

令和元年の暮から翌一月にかけて、疫病は突然姿を現した。かつては好奇心の対象でしかなかった過去—ペストの時代が—突然わが身に迫ってきた。SARS、MARS、エボラなど、近年にも疫病は流行したが幸い、日本人にとっては「対岸の火事」程度で済まされてきた。ところが、武漢から発生したこの疫病は瞬く間に世界に広がり、ついには我が国をも侵した。ようやく日本人がこの病をリアルに感じ始めた時には感染を食い止める機会をすでに逸していた。

私は時勢を評することができる程、思慮深くはない。また、疫病の知識も極めて浅い。人間の心理や経済、政策を論ずるだけの素養もない。しかし、何かを、何らかの形で残すことは、この時代に生かされている者の権利であり義務であると考える。

私は疫病の時代を生き証とし、実際に見たり聞いたり体験したりしたエピソードの一部を書き残したいと考えた。

1. 優秀な友人

大変優秀な友人がいる。一緒に仕事をしたことがあるが、よく気が付き、論理的で、創意工夫に富んでおり、読書家で、常に情報収集を怠らず、向上心に溢れている。

その友人は疫病がいよいよ深刻さを増す中、何某という実業家の論説を持ち出し、経済を回すべきだ、インフルエンザや交通事故の死者数のほうが多い、人間の活動にリスクのないものなど一つもないのだから外出も会食もやればいいのか、と真面目な顔で話していた。未知のウイルスに対して、また海外の惨状も伝え聞いているのに、危機感を感じていなかった。

彼はその某実業家を師の如く思っているから無理もないが、多くの言説を聞き、自ら選り分け、自ら判断を下すことは大変重要である。いみじくもユリウス＝カエサルは、「人は現実すべてを見るのではなく、見たい現実を見る」と遺している。自らに耳障りの良い言説をいったん保留し、反対の言説に耳を傾けるだけの度量を少なくとも持つようにしたいものである。

2. 寒空の中マスクを買いに並んでいる人たちについて

転職の都合上、令和2年の3月はほぼ毎日が休みであった。それでも週に2、3日は仕事があったし、何より4月からの勤務ではマスクは必須である。我が家のマスクも在庫が心もとなくなったので、暇に飽かしてマスクの行列に並ぶことにした。

物見遊山の好奇心半分であったから不謹慎の批判は甘んじて受ける。

が、自分だけでなく、故郷の親や親戚の小学生もマスクが足りず困っていたので、これに分け与えようという動機があったというのがささやかな自己弁護である。

久しぶりの早起きに何とはなしに気が高ぶり、開店前の3時間も前に様子を見に行った。すでに10人以上の人が列を作っていた。私は開店まで読書に励むつもりで数冊の小説を持ってきていたが、私の前に並んでいたスキンヘッドで色のついた眼鏡をかけた中年男性が辟易するほどに話かけてくる。家のマスクがなくなり、マスクをせずに食事へ行ったら店員に露骨に避けられた、と極めて凶悪そうな人相で語るのだから、おそらく怯えていただけだろうと思ったが言わないでおいた。「沈黙は金」と諺にもある。列の前のほうでは老婆が大きな声で喋っていた。一番前の人は前日23時から並んでいる、私は今日は朝4時に来たけど、さすがに勝てない、最近是这样して並ぶことが楽しみ、生き甲斐になっていると言う。ちらと見ると先頭の者は寝袋に潜り込んでいた。

朝早い時間帯だったためか、列を作るのは老人がほとんどで、孫のために、息子のために、娘のために並んでいるのだ、と皆が口をそろえて言っていた。

零度まで冷え込む寒空の中であつたが、ご老人達は実に充実した顔をしていた。大切な人を想って行うことは、苦しいことでも案外成し遂げられてしまうことが多い。しかし、自分のためだけにやることは少しの困難で容易に投げ出してしまうものである。

それにしてもマスクの供給が戻ったため並ぶ必要もなくなった今日、早朝から並ぶことに生き甲斐を見出していたあの老婆は新しい生き甲斐を見つけられたのだろうか、気にかかるところである。

3. ある地方政治家の語ることについて

防疫と経済の狭間で、政府や自治体は補助金給付に走った。しかしその対象には些か疑問に思うものも少なくなかった。

中でも「GO TOトラベル」からは露骨なまでに利権の臭いが漂っていた。最前線で歯を食いしばっている医療従事者には恩恵を与えず、それまでの自粛ムードに倦んでいた人々に外出許可の「お墨付き」を与えた結果、感染拡大を助長した。結局、医療の負担は増すばかりであった。「GO TO」以外にも様々な人々を対象に補助金はバラまかれたが、最も感謝し、最も支えるべき医療関係者へは、タワーやビルのライトアップが送られた。挙句、経営が圧迫された病院では看護師にボーナスも出すことが出来なかったり、極度の肉体的・精神的疲労で医療従事者が次々離職したりするという、疫病下とは思えない歪な現象が起きた。

一人の老政治家は一部の集団のみを利する構造に静かに憤っていた。

「この一連の給付金、助成金でいったやー（一体）何人が恩恵を受けるんだ。財源は税金だわ。納税者みーんなが恩恵を受けにや（なければ）いかんだろう。税金ちゅーのは、金持ちは多く出したってそんなに痛ないけどな、人口のほとんどは庶民だわ。庶民はそう多くにやあ（ない）稼ぎから出すもんだで、いてやー（痛い）だろう。だで（だから）できるだけ多くの人に還元するやり方を考えにや（なければ）いかんのだわ。」

4. 批判しない人たちについて

この疫病への政府の動きは初めから精彩を欠いていた。後手後手に回り、打つ手打つ手が裏目に出た。冷静に、健全に見て、批判されるべき点が多い。しかしある人たちは

「未知の病気との戦いなのだから、その時その時の判断に良し悪しはつけられない」

「困難な中よくやっている」

「野党よりも良いと」

と語った。

人はそれまで信じていたものに裏切られると、自ら傷つくことを避ける防衛本能が発揮される。一度正しいとも持ったものを否定するのは、過去の自分を否定することであるからストレスがかかる。そのため、多少強引でも擁護に回るのである。

賢い人というのは健全な態度で、しかるべき時は賞賛し、しかるべき時は批判できる人である。それができないとデマゴグによる扇動を受け、時として人に危害を加えることにもなるであろう。

5. オンライン飲み会について

外で飲むのはやはり怖いので、なじみの飲み屋には申し訳ないが断腸の思いでオンライン飲み会を行った。初めは面白くもなさそうだと思っていたものの、やってみると良い面がある。まず、安上りである。店で飲むより買って来たほうが当然、安い。また、予め量を決めて酒を準備しておくので、飲み終わったらそれでおしまい、飲みすぎることがない。しかもちょっと今日の20時から、といった具合に気楽に誘って飲める。スパッとボタンを押せば「まあもう少し」とだらだら引き止められることもなく自分のタイミングで終わることもできる。これはなかなか便利なものだと思って何度かやってみたが、すぐにその弊害が露になった。

まず、カネがかかる。見栄を張ってちょっといい酒やつまみを揃えるので結局は高くつく。また、多めに買い込んでおくのでついつい飲みす

ざる。しかも気軽に誘える分、頻度が増える。終電もないので深酒しがちになりいつまでたっても終わらない。

文明の利器も使い方次第で毒にも薬にもなる。肝心なのは取り扱う人間の心掛けだろう。

6. 善良な事業者について

衛生用品を製造販売する会社が、学校や各施設へ消毒剤などの寄付をしたと聞く。このようなことは少なくない。寄付を行う事業主の多くが「今年はずいぶん儲かった。このようなときに儲けを独占するのはよくないことだから、社会に還元したい」と言う。

資本主義経済では儲けること自体は何ら悪いことではないが、「一人勝ち」を「良くない」と感じるのはなぜであろうか。

「役に立ちたい」を謙遜して「儲けて悪い、申し訳ない」という言葉に置き換えているのかもしれないが、寄付の際によく聞く言葉は「社会に還元」である。「還元」は「元に戻す」という意味だから、このような事業主たちにすれば、疫病下での特需というのは本来得るべきものではない利益、ある種の後ろめたさを伴う利益なのではないだろうか。

いずれにしてもこのような謙虚さと奉仕の心を心がけたいものである。マスクを買い占め転売した人々とは好対照といえるだろう。

7. 成人式中止について

各地で成人式の中止が発表された。楽しみにしていた人も多だろうし、一生に一度のことであるからそれについては同情する。ある成人がインタビューで

「成人式を中止にした大人を許すことができない。」

と言っていた。

この人は成人式に出ながらにして、精神はいまだ幼い子どものようである。

結

この疫病は現在の日本に個人主義、短絡的思考、思考停止、無責任、危険な楽観主義等が蔓延していることをはっきりと映しだした。だが一方、このような困難な中でも他人への思いやり、高い職業倫理、矜持、希望をもって日々を生きている人々もいる。そのような人が集まって、「家族のため」から「仲間のため」へと「ため」の範囲を徐々に広げ、最後は「御国のため」となったとき、国の力は最大限に引き出され、防疫は効果を爆発的に発揮するだろう。もちろんこれはファシズム化の危険を孕んでいる。だからこそ一人一人が健全な批判精神を持ち、価値観は様々あれど、最後には「日本」として一つになれる「象徴」あるいは「神話」が求められているのではないだろうか。将来の防疫、あるいは国難に備え、そのような人を育成することが求められている。そして、それを可能にするのは教育であるが、それは別の機会に論ずるとしたい。